

---

---

# 米国で保育を受けた

## 私の子ども



藤田美南子

---

---

お茶の水附属幼稚園で現在お世話になっている長男孝一が生まれた時、夫は米国中西部のとうもろこし畑に囲まれた小さな田舎の大学町（電話帳の厚さが一センチぐらいしかない）にあるインディアナ州立大学において、既に教鞭をとっていました。私は生まれたばかりの孝一をキャリングベッドに入れ、五歳と三歳になった長女と二女には、小さなリュックサックを背負わせて、旅客機に乗り込み、シカゴまで迎えに来た夫と合流して、二回目のアメリカ生活を始めました。この時の長女と二女が受けたアメリカでの幼児教育の印象を、思いつくままにつづつてみたいと思います。

夫の勤務していた物理教室の主任教授の奥様の奔走で二人の娘は運よく、教会附属のプレスクール（Preschool）の五歳児、三歳児のクラスに入園することが許されました。どのクラスの人数も男六名、女六名という小人数から成り、午前と午後の二部制になっていました。満員の場合、入園希望者は Waiting List にのせられ、空席ができるまで順番を待たねばなりません。Participation と呼んで一学期に一、二度母親は担任の先生の手助けをし、部屋のと片付け、掃除をし、ずっと子どもを観察しながら、保育の手伝

いをする義務がありました。

長女の担任の先生 Mrs. Miller は園長 (Director) をかね、小柄でびちびちした女性で、普通のアメリカ女性と異なり重い荷物を持って、自分から先に立って階段を急ぎ足に上り下りされました。クエーカー教徒であるというミラー先生は、万事はつきりした意見の持主で、その気持ちのよい人柄と共に小さな町では評判の先生でした。たとえば、寒い雪の朝、送りに行つて子どものオーバーを脱がせてやろうとすると、「彼女は一人ですることができません」といわれてしまいます。行儀作法についても考え方の違うアメリカとて、先生が生徒たちに話しかけている間は、机の上にひじをつけていてもよい、床に寝そべっていてもよい、どんな姿勢でも、必ず眼だけは先生の眼を見て、きいていなければいけないというのが鉄則でした。

またつねづね、子どもにどんなことでも強制 (Force) してはならないと強調されていたことが思い出されます。ある時、園外保育で写生をすることになり、娘は見物人の多いのが気になり、いくらすすめられても、もじもじするばかり、とうとう涙が出てしまった時、「泣くほどしいて、私がわるかった」とあやまられてしまいました。

この点ではミラー先生にかぎらず、普通の家庭でも「ピアノを弾かなければおやつを上げません」などといって子どもにおけい古ごとをしいたりすることは見受けられず、子どもの気持ちをまず大切にしているようでした。

さまざまの個性をもつたアメリカの子どもたちの中でも、特に女の子の社交的なことには眼をみはるほどでした。初めて教室に子どもを連れて行つた時、「日本から飛行機で来た新しいお友だちにいろいろ助けて上げたい人？」という先生の問いに、すぐに「はい」と一人の女の子が名乗り出ました。「私の名はミッシー。私が助けてあげます」と私の所にやって来て私の胸のブローチをみて「すてきなブローチね」と話しかけられ、どきまぎしたことでした。こんな友だちに囲まれて、引込み思案の私の娘も、言葉も通じないままに、その日から楽しい毎日を送りました。ある日、二女が、「今日は男の子のダニーにいじめられたよ」とおこつて帰つて来ました。そのことは先生もちゃんと知っていて、「ダニーは、何とかして愛情を表現したいと思つてはつべたを両手で引張つたのだから、悪く思わないように。家では何と聞いていただろうか」と心配してたずねられました。

クレヨン、はさみ等はすべて幼稚園備えつけて、はさみの垢くらは左利き用で色で区別してあります。子どもの身体の大きさほどある紙を与えて、絵のはびのびと書かせます。三歳児には三原色、五歳児には六色ぐらいの絵具と、太い筆を与えて好きな色を作らせます。

毎学期のはじめ、お父さんの古ワイシャツを寄附させ、袖など適当にきつてスモック代りに着せ、皆ボロを着て思い思いの絵をかきます。それぞれが何かを考えて、前衛的な、抽象画を書いています。ある時は工作でしょうか、いろいろの形のマカロニに色をつけ、糊で紙の上にのせたり、はらせたり、立体感を養ったりしました。日本の習慣では食べ物遊びに使用することは考えられないので思わず眼をみはってしまいました。こんなふうにしてできあがった抽象画の中には、いろいろ教育を受けてしまった大人には、とてもできない天衣無縫なものがあり、アパートの居間に飾ってみました。

すべて、自分のペースでやれということか、紅白にわかれて「用意どん」というような競走は、いっさいありませんでした。しかし学期末にはスクールパーティーといって、子どもたちが皆でお菓子を焼き、親たちの名札を作り、招

待状を送り、その日は親も子どもたちと一緒に遊んだり、子どもの給仕してくれるお茶やお菓子をたべて楽しい半日を過ごしました。

クラスの人数が少ないので、眼が届きやすいからでしょうが、生徒の数だけの金槌、のこぎりなどの大工道具が揃っていて、自由に木を切ったり金槌でたたいたりできるので、特に長女はこれに熱中していたようでした。

時々園外保育があり一本の綱に十二名の園児をつかまらせ、スパーマーケットの冷蔵庫を見学させたり、飛行場、博物館など連れて行ってもらいました。しかしクラスの中でいたずらで、どうしても団体の規律を守れぬトニーという子がいて、ついに後期からその子だけの付添いの教師をつけることが要求されました。こんな時は教育学部の学生が雇われ、一日付き添って監督していました。このように一見、自由で何の拘束もないように見えながら、他人に迷惑をかけてはならないというしつけについては厳しい面もあります。

毎回、保育の中ほどにクッキータイムがあつて、お菓子とジュースが紙コップに配られます。子どもたちの中の当番が配り、配られた子どもは、必ずはつきりと「ありがと

う」をいうことを要求され、食べる前は皆、姿勢を正して食事の祈りを唱えます。

私の子どもたちが滞米中に受けた保育は、一口にいえばこんなものでした。初め、口が重くて、いっこうに英語を話そうとしない子どもたちのことを心配され、「私の方が日本語を習おう」とクラス中で日本語の単語を覚え始めたこともありました。それでも帰国近くなったころには、毎日家で話している日本語もおかしくなり、反対に英語は、親もとても真似できぬ、見事な発音をする事ができました。帰国してしばらく「ゴファン」「オフアシ」とハの発音がファとなっていたのも時と共に正しい日本語になり、英語はすっかりぬけてしまったようです。

このような、子どもにとって迷惑だったかもしれない、親の都合で過ごした外国生活が、どんな影響を子どもに及ぼしたか、はつきりと私には判断が付きません。しかし帰国当時、日本の幼稚園や小学校で、頭を下げておじぎをしない、アメリカならよいが教室での行儀が悪いなどと注意を受けたりして、本来引込み思案だった子どもが、すっかり自信をなくし、更に消極的な子どもとなり親をあわてさ

せる時期もありました。やがてその長女も小学校高学年となり、何でも思ったことは物おしせず、どんどん主張する、負けん気の強い子どもに変身してしまい、今ごろ、アメリカでの保育の影響が表われたのだろうかと思う、このごろです。

今でも断片的に覚えている外国生活の思い出が、何か国境は越えても人間は一つというような国際感覚を持ち続けてくればよいかと願っています。帰国のとき、クラス友だちの前で、日本の歌「夕やけこやけ」を元気に歌って、ミラー先生に「本当にうれしかった」といわれたことなどは非、胸にしまっておいてほしいと思います。

アメリカで知り合ったインド人の友人が、語ってくれた、「インドの家庭教育の理想は、五歳までは専制君主として、五歳から十五歳までは奴隷いとして、十五歳以上は真の友人として」という言葉を思いおこしつつ、自由奔放で、個性を育てながら、一本しつけの厳しさが通っていたプレスクールの教育のよい点を、三人の子どもに残したいと心がけています。